

第5回生存科学シンポジウム



より良い生存のために

～差別と排除を超えて～



プログラム・抄録集



日時：2017年12月9日(土)13:00～17:00

場所：上智大学四谷キャンパス6号館201号室

ごあいさつ



平和な世界で人類が共存し、協力しながら互いに生存していくことが、理想的な社会であり国家であると思います。それはこの地球

上の人類は皆同じ人種であり、たった一種類です。

互いに協力して平和を守っていかなければならないのに、現時点の世界を見てみると、よりよい人類の生存を求めるのではなく差別と排除の論理が横行しているのが現状です。このような時代で日本は平和を維持しながら各国と協調していくためには、何をなすべきかが問われています。そのような課題の中で、よりよい生存の社会を構築していくには、生存科学研究所としてどのような課題に取り組んでいくかです。

公益財団法人生存科学研究所は創立者の故武見太郎先生の理念に基づく生存の理法として、今回のシンポジウムを開催することにしたしました。国内外に見られる現状を踏まえて、『より良い生存のために、-差別と排除を超えて-』と題して参加者の皆さんとともに討論したいと思います。

公益財団法人 生存科学研究所
理事長 青木 清

プログラム

13:00~13:00 開会の辞.....青木 清

(司会：藤原成一)

13:05~13:55 基調講演.....森 千香子
「分断する社会」はどのように形成されるのか
～現代フランスの事例を中心に～

(司会：高木廣文 小島静二)

13:55~14:35 講演1.....アガスティン サリ
多文化社会と排他的要素 ～インドの事例～

14:35~14:50 休憩

14:50~15:30 講演2.....門田 美恵子
子どもの生存を脅かすもの

15:30~16:10 講演3.....松下 正明
高齢者差別と排除

(司会：小島静二 高木廣文)

16:15~16:55 パネルディスカッション

16:55~17:00 閉会の辞.....小泉 英明

基調講演

『分断する社会』はどのように形成されるのか ～現代フランスの事例を中心に～



森 千 香 子

Chikako MORI

一橋大学大学院准教授

略 歴

一橋大学大学院法学研究科准教授 専門は都市社会学・国際社会学
フランス社会科学高等研究院社会学研究科博士課程修了 博士(社会学)
1999-2001年 国際交流基金海外専門調査員
2005年 南山大学外国語学部フランス学科専任講師
2008年 同准教授
2012年 一橋大学大学院法学研究科准教授
2015-16年 プリンストン大学移民開発研究センター客員研究員
2016年
第16回大佛次郎論壇賞、第33回渋沢・クローデル賞特別賞受賞

主な著書

Social Housing and Urban Renewal: A Cross-national Perspective
(共著、Emerald、2017年)

『排除と抵抗の郊外：フランス〈移民〉集住地域の形成と変容』(東京大学出版会、2016年)

『国境政策のパラドクス』(勁草書房、2014年)

本講演は、2015年11月に起きたパリ、サン・ドニ同時多発襲撃事件など、社会、政治的緊張の続くフランス社会の現状と背景を考察する。同国は「人権宣言」の国として知られ、1970年代以降は人種差別撤廃に向けた様々な取り組みが行政、民間など多様なアクターによって行われてきた。ところが1980年代半ばより、国内の移民に対し敵意を剥き出しにする排外主義政党が勢力を拡大し、2017年大統領選ではルペン候補が決戦投票に進出するなど、フランス政治に多大なる影響力を行使している。

一方「テロ事件」対策が注目される背後では、過去三十年間にわたって旧植民地出身のマイノリティ住民たちが郊外の老朽化した団地などに空間的に隔離され、フランス共和国のスローガンである自由、平等、博愛とは掛け離れた差別と貧困のなかに事実上放置され続けている。

以上のような現代フランスの現状についてデータをもとに提示した後、こうした状況について行われてきた諸分野の専門家による分析を紹介し、それらの分析がどのような点で問題を孕んでいるのか、「文明の衝突論」のような文化本質主義的議論だけでなく、社会学者による「社会的排除」も批判的考察の対象とする一を解説する。その上で、社会学的アプローチに基づいて「分断社会」の背景について新たな見方を提示し、多様な人間が平和的に暮らせるような共生可能な社会のあり方を模索する。

多文化社会と排他的要素 ～インドの事例～



Augustine Sali

アガスティン サリ

上智大学総合グローバル学部教授

略 歴

インド、ケーララ州出身

カリカット大学（政治学）、JDV 大学（哲学）、上智大学（神学、地域研究 PhD）で学び、特にエスニック政治学の分野で紛争や人権、政治と宗教の研究

上智大学総合グローバル学部教授、上智大学学生総務担当副学長。

主な著書

『アジアにおけるイエズス会大学の役割』編、上智出版（2015）；

“Secularization and Religion Policies in Political Affairs

Global and Asian Context”, *Sophia Journal of Asian, African, and Middle Eastern Studies*/No.34, pp. 27-58, Institute of Asian, African, and Middle Eastern Studies, Sophia University(2016)

「インドのシリアカトリック教会」『東方キリスト教諸教会』三代川寛子編（2017）等

文化の異なる集団が複数存在する社会の中で、その幾つかの集団が単一の集団アイデンティティを過度に強調する傾向が現れており、そこに常に排除要素が見られる。インド社会は言語、宗教、それにカーストといった要素で分断されている。国民一人一人は、時には宗教、時にはカースト、時には言語に基づくアイデンティティを強く意識する。どのアイデンティティが重要かは、政治状況によって変わってくる。その複雑な社会に選挙というダイナミズムが加わる。しかも、独立闘争の英雄やエリートたちの時代から、より庶民的な層へと実質的政治参加が拡大してくるダイナミックな過程においてである。インドの歴史は、選挙過程を通して、エスニック集団やカースト・グループ、宗教、マイノリティ等のアイデンティティが次第に強まってきていることを示している。最近のインド社会の文化ナショナリズムを指示する人々の排除主張や単一的アイデンティティを強調する中で起こる排他的要素を分析し、多文化社会の方向性について考える。

子どもの生存を脅かすもの



門田 美恵子

Mieko KADOTA

元養護教諭・校長

略歴

1943年北海道生まれ。看護師、博士（心身健康科学）
公立小学校養護教諭、教頭、校長、鎌倉女子大学教授を経て、
現在、市教育委員会委員、人間総合科学大学非常勤講師、市児童
館運営連絡協議会副会長 他

主な著書

「子どもの生活と心身の健康－学校生活を快適に－」
（門田美恵子・吉田浩子 青木清監修 産業図書 2017年）
「保健室からの登校－不登校児への支援モデル－」
（國分康孝・門田美恵子誠信書房 1996年） 他

日本から遥か彼方の紛争地で、多くの子どもたちが飢餓に瀕しているという報道に心を痛める人は多い。しかし、今やこれは遠い国の話ではない。一見豊かで平和に見える日本においても、貧困、虐待、いじめ等の様々な理由から生存を脅かされている子どもたちがいる。子どもの生存を脅かす様々な事象に直面した時、家庭、学校、行政がどのように対処すれば子どもを守ることができるのか、校長/養護教諭として経験した具体的事例を通してその手法について考えたい。

例えば、学校内におけるいじめは、早期に発見し、教師や友人に対する信頼感を取り戻し、安心して過ごせる居場所を子どもたちに提供することが基本となる。保護者から虐待を受けた子どもはその事実を隠し、認めたがらないことを知っていれば、教師は子どもの命の危険を見逃さず、迅速に対応することができる。不登校の陰には、様々な事情が隠されていることもあり、反対に特段の理由はなく登校したくてもできないこともあり、一律の対応は困難で、学校が主体的に各ケースと適切に関わることが重要となる。また、保護者自らが生きることに必死で、子どもに対し十分な配慮ができない家庭もあり、学校には行政と連携しつつ保護者と一緒に子どもに最適な居場所を考える姿勢が求められる。子どもの生まれもった特性によって、周囲との軋轢が生まれる場合もあり、医療機関と連携しながら良い生活環境を整えていくことが肝要となる。これらの様々な脅威に遭遇した子どもが、「助けて！」と懸命に自らの危機を発信しても、その声はあまりに小さくて、周りの大人たちに届かないことであろう。だからこそ、子どもの近くにいる大人たち、保護者や教師は、アンテナを高くして心の目と耳でその信号を受信し、子どもを守り抜くことが大切と考える。そのためには、学校をはじめ子どもに関わる様々な機関の連携が必要不可欠であり、学校はその手法を熟知する必要があると言える。

高齢者差別と排除



松下 正明

Masaaki MATSUSHITA

公益財団法人生存科学研究所副理事長
東京大学名誉教授

略 歴

- 1962年 東京大学医学部卒業
- 1966年 都立松沢病院医員
- 1972年 東京都精神医学総合研究所副参事研究員
- 1986年 横浜市立大学医学部教授（精神医学講座）
- 1990年 東京大学医学部教授（精神医学講座）
- 1998年 東京大学名誉教授、東京都精神医学総合研究所長
- 2001年 東京都立松沢病院院長
- 2009年 東京都健康長寿医療センター理事長

- 2008年 瑞宝中綬章授章

3A現象とは、差別（Ageism）、虐待（Abuse）、排除・抹殺（Annihilation）の3つの現象をさすが、本講演の目的は、認知症診療に日々たずさわっている立場から、現代社会に根強くはびこっている高齢者や認知症高齢者に対する3A現象の実状に言及し、高齢者や認知症高齢者の人間としての尊厳を守るために、3A現象にどう立ち向かっていかねばならないのかを考察することにある。現代社会における高齢者への偏見、しばしば高齢者ステレオタイプ、高齢者神話と表現される偏見を背景に、ただ高齢者であるという理由だけで人間を差別する現象を、1969年米国のバトラー RNがAgeismと名づけたが、以来、世界の、とくに先進国でAgeismが問題となり続けている。政治、経済、法律、司法、行政、教育、雇用、職場、住居、マーケティング、メディア、情報、医療、交通、災害、緊急事態対応、ナーシングホーム、犯罪等社会のあらゆる場でAgeismがみられていることがつとに指摘されている。

本邦では、1980年代より高齢者虐待が社会問題化され、2006年4月、「高齢者の虐待防止、高齢者の養護者に対する支援等に関する法律（高齢者虐待防止法）」が施行されることになった。以後毎年、厚労省より、高齢者虐待対応状況の調査結果が報告されているが、最新の平成27年度報告によると、養護者や要介護施設従事者等による虐待の相談通報件数と虐待判断件数が漸増し、とくに施設従事者による虐待が激増している実状がある。

2016年7月26日、知的障害者福祉施設「やまゆり園」で、元男性職員が、「障害者は生きている価値がない」という思想のもとに、19人を刺殺、26人に重軽傷を負わせたという事件が生じた。精神障害者でなく普通の成人がそのような思想に基づいて行った殺傷事件は、かつてのナチス政権のもと「生きるに値しない生命」という理由で30万人以上の障害者が殺害された悲慘な歴史を思い出させるが、近い将来、排除・抹殺の対象となる障害者に認知症高齢者が含まれる可能性があることに警鐘を鳴らしたいことを訴える。

シンポジウム実行委員

松下 正明 東京大学名誉教授、元東京都健康長寿医療センター理事長
小泉 英明 日本工学アカデミー上級副会長、(株)日立製作所名誉フェロー
小島 静二 小島歯科クリニック院長
高木 廣文 共立女子大学看護学部教授、元東邦大学看護学部教授・学部長
藤原 成一 元日本大学芸術学部教授

生存科学シンポジウムのあゆみ



テーマ：21世紀の生存科学を考える

2013年12月14日(土) 学士会館大講堂

第1回

基調講演 養老 孟司：21世紀の生存科学を考える
講演1 青木 清：生存科学をどう捉えるか
講演2 小泉 英明：生存科学と教育について
講演3 山下 俊一：東日本大震災から生存を考える

テーマ：未来からの反射

2014年12月13日(土) 大手町サンケイプラザ 4階ホール

第2回

基調講演 高久 史麿：医の現在と未来
講演1 濱田 篤郎：疫病は警告する
講演2 松下 正明：認知症医療への期待と不安
講演3 太田 秀樹：出前医者が語る人生を支える医療
講演4 大熊由紀子：日本の医療の困った「忘れもの」

テーマ：未来への懸け橋 よく生きるための倫理をひもとく

2015年12月12日(土) 一橋大学一橋講堂

第3回

基調講演 青木 清：生命文明における生存科学
講演1 小泉 英明：21世紀の科学技術のあり方
講演2 加藤 尚武：環境倫理の過去・未来
講演3 浅野 茂隆：修復医学に学ぶ生命倫理
講演4 佐藤 雅彦：会える別れと会えない別れ

テーマ：生の豊かさや貧しさ 21世紀の生存を考える

2016年12月10日(土) 東京大学鉄門記念講堂

第4回

基調講演 島園 進：いのちの尊さを見失う「科学」
講演1 上野千鶴子：「当事者主権」と死の自己決定
講演2 武藤 真祐：21世紀の終末期を支える
講演3 安梅 勅江：子どもの生の豊かさをめざして

memo

公益財団法人 生存科学研究所

生存科学研究所の設立は、人間の生命の探究を目標とする従来の縦割りの学問ではなく、人文・社会科学、自然科学を包摂し、それぞれの分野の理論思考を相互に統合させつつ体系化をはかろうとする、より本来的な包括概念として構想された点であります。近代科学は要素還元論に基づいた縦割り方式で、専門化による学問体系を構築してきましたが、20世紀半ばからの科学と技術の飛躍的な進歩は、同時に公害問題、地球温暖化に伴う気候変動、軍事的兵器等の開発と乱用、遺伝子組換え技術の乱用等、人間の生存に甚大な影響を及ぼしています。旧来の学術的な組織では、総合的にこれらの問題を扱うことが難しく、本研究所の理念は先駆的であります。

更に、21世紀に高度に発達した文化・文明の中で、人間の生命に関わる科学技術とどう取組むべきか、一般市民に情報発信して、互いに討論することで、人間の生存を考えることは、市民による民主的な民意の形成にとっても非常に有益と考えています。当公益財団法人は、生存科学の調査研究および普及啓発のための事業を行っています。

* 生存科学研究所への入会のお誘い *

生存科学研究がもたらす社会的貢献に深い関心ももち、また、生存科学研究への参加の意思を持たれている方々に、研究の成果を提供するとともに研究への参加の機会を提供するものです。この制度は、同時に研究所の活動を発展させるためのエネルギー源となるべきものでもあります。

会員の皆様からの会費（継続寄付）は当研究所の基本財産収入とともに、研究事業を拡充し、より一層社会に貢献するための貴重な財源となります。

〔会員制度の概要〕

1. 会員制度の種類

個人会員および機関会員

2. 会費

1) 個人会員	維持会員	: 年間一口	2万円
	シニア会員	: 年間一口	5千円 (75歳以上の希望者)
	ジュニア会員	: 年間一口	5千円
2) 機関会員		: 年間一口	10万円 (原則として3口以上)

3. 会員への特典

- (1) 寄付金控除が受けられます。
- (2) 研究所が開催する各種シンポジウム・講演会・懇談会等への無料参加または情報提供
- (3) 学術誌『生存科学』（年2回発行・配布）、生存科学研究ニュース（3ヶ月毎に発行・配布）をとおして生存科学に関する広範な情報提供
- (4) 学術誌『生存科学』への投稿資格
- (5) 各種研究成果の配布とその利用
- (6) 研究受託、研究者・講師の派遣または紹介
- (7) 研究委員会への参加の前提条件付与
- (8) 機関会員の代表者またはその代理人に対する個人会員としての資格付与

生存之法



公益財団法人 生存科学研究所

〒104-0061

東京都中央区銀座 4-5-1 聖書館ビル 303

TEL : 03-3563-3518

FAX : 03-3567-3608

<http://seizon.umin.jp>